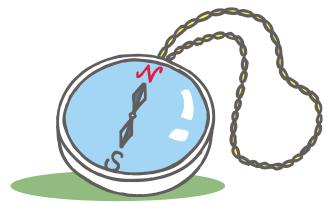


羅針盤



第 8 号

令和6年6月17日(月)

◆ 「虚空裏（こくうり）に櫛（くさび）を釘（う）つ」

少し難しい言葉でもあり、余り聞きなれない言葉もあるとは思いますが、生徒の皆さんには「虚空裏（こくうり）に櫛（くさび）を釘（う）つ」という言葉を知っているでしょうか。この言葉は、禅（ぜん）の言葉で、その意味は、「空気の裏側に釘を打つ」ということを表しています。この行為そのものは、全く役に立つともないような無駄と言っても仕方ない行為でしょう。しかし、「そういった、一見、無駄とも思える行為でもおそらく思ってはいけない」ということを教えてくれている言葉です。料理人になろうとするなら、まず最初の修行となるのは、皿洗いから始まるのではないかでしょうか。見習いの人たちの中には、このことを無駄な雑用であると考えたり、あるいは、雑用を押しつけられたと不満に思う人がいるかもしれません。それでも、超一流と言われる料理人たちも最初は皿洗いからスタートしているのです。では、超一流となった優秀な料理人とそうではなかったとの違いは何なのでしょうか。それは、優秀な料理人となった人たちは、皆、お皿の残りものからソースの味付けを学んだり、お客様の食べ残し具合から人気メニューを探ったり、盛りつけの量が多すぎないかと探ったり、そして、併せて、嫌がることなく厨房に居続けることで立ち仕事に必要となる体力もしっかりと培われていったのです。一見、無駄とも思えることの中にも、得られることがたくさんあるというわけです。要するに、気持ちの持ちようの違いで見えている世界に大きく違がでてくるということです。無駄だと思ってしまった途端、それは本当の意味での無駄へと変わってしまうということです。でも、ひとたび、「ここから、いったいどんなことが学び取れるだろう?」というように意識を変えて持つことで、どんなことでも一瞬にして、その場が素晴らしい学びの場へと変わるのであります。すべては、その場にいる人の考え方次第で得ることはいくらでも見つかるということです。私たちも、日頃から暗に無駄なことであるといった決めつけから始めるのではなく、学びの機会を得たと考えて取り組めることがたくさんあるのではないでしょうか。



◆ 「虚心坦懐（きよしんたんかい）」

先入観を持たない、広く平らな心。あるいは、何のわだかまりもない素直な心で、物事に臨む態度のことを「虚心坦懐」というそうです。「虚心」とは、心に先入観やわだかまりがなく、ありのままを素直に受け入れることのできる心の状態であり、「坦懐」とは、心が広く、物事にこだわらないこと。この二つの言葉を合わせてつくられた言葉ですが、人は常々、不満や悩み、不信感などを持ってしまうようなことがあります。年を重ねることや経験を積み重ねることで先入観をもってしまうことが、逆に自分自身の行動にストップをかけてしまい、思いもよらぬ好機を逃してしまうこともあります。そんなときにこそ、もう一度、原点に立ち返り、もっと幼かった子どもの時の素直な気持ちを思い返して、物事にあたる方が結果として納得ができることが多いのではないでしょうか。先入観を持たない、ニュートラルな状態を普段から心掛けたいものです。

